

NON NOVEL



NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一ヵ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に否定を発し、人間の明日を支える新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていききたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」発見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—49

ウルフガイ・シリーズ番外編 ^{ワールドラノ} 狼の世界

昭和51年9月30日
昭和54年12月25日

初版第1刷発行
第11刷発行

著者 平井 和正
発行者 伊賀 弘三良
発行所 しょう 伝 社

東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル 〒101
☎ 03 (265) 2081

発売 小学館

印刷 萩原印刷 製本 関川製本

...フガイ・シリーズ
番外編

平井和正

狼の世界
(ウルフランド)

あとがきの前払い

この五年間、短編作品を一本も書いていない。元来、短編小説が性分に合わず、作品量も他のSF作家仲間に比べると少ないのだが、少ない分だけマンガ原作やTV動画シナリオなどに力を割いていたわけである。

本来、長編型の作家だと自分でも思うが、ウルフガイなどの長編シリーズものに手を染めて以来、短編の注文は一切謝絶してきた。根が無器用者で、仕事にバラエティーを持たず資質に欠けているからである。とくに心臓発作にお見舞いされた後は、体力にも乏しくなり、仕事量は低落する一途になってしまった。

それにともない、頭の構造も長編型になじんでしまったのか、もはや短編のアイデアが湧いてこない。意欲もない。モチーフもプロットもすべて自動的に長編用に料理されてしまう。

徳間書店から日本SFアンソロジーを出していらっしゃる筒井康隆氏にも、たまには短編を読ませてほしいと言われてしまうが、こればかりはどうにもならない。短編を書く体質ではなくなっているらしいのだ。

しかも、私の読者たちは明らかに私の長編を好み、かつ期待している。五本も長編シリーズを抱えこんでしまったいまとなつては、スケジュール調整に四苦八苦で、敢えて苦手の短編に取り

組む時間もなく、気力もない。余計なことに力を分散するなど恐い読者たちに叱られてしまう。なにしろ旧作の短編を集めて刊行してさえ、なにやら勘違いして、ウルフガイを書かずに怠けていたのだろうと詰問と叱責の投書が山ほど届く。義理があつて断わり切れない短文のエッセイを書いても怒られる。おんどりやあウルフガイだけ書いておればええのじゃあ、と鞭を当てられ放し。だから私はエッセイも雑文も書かず、TV、ラジオ、講演、対談、座談会いっさいを謝絶している。私は読者の手紙に返事を書くのが好きなのだが、それすらも最近は風当たりが強くなってきた。くだらんことせず、はよウルフガイ書きさらせえというのである。本のあとがきだけは許す、というお達しである。

おっかないお目付役に一挙一動を監視されているという強迫観念が、最近とみに高じてきた。余儀ない事情があつてクラブやバーのなまめかしいような雰囲気^{ひんぎ}に浸っているさなか、こんな現場を見つかったらどうしようと冷風が背筋をよぎる。(念のために強調しておくが、私は自ら求めて紅灯の巷にさまよいでることは決してない！)

ことほどさように刻苦勉励^{こくくべんたい}しているのであるけれども、いくらなんでも四六時中ウルフガイ・シリーズばかり書いているわけにはいかない。

いつだったか、星新一氏に、手慣れた手法に安住するな、と苦言を呈されたことがある。作家たるもの、絶えず新境地をめざし冒険を恐れるなという星さんの信念の吐露^{とろ}だったに違いない。私のもっとも尊敬する先輩作家のこの苦言はずしりと胸にこたえた。

「平井君の最近の小説は、あまりに速く読めてしまう」

と、星さんはいった。

「そうなんです。読者のページを繰る手を休ませず、もっと速く読ませようと思って、その技術を研鑽しているんです」

私は決して弁解を試みたものではなかった。読者を猛烈なスピードに巻きこんでしまうこと。それがエンターテナーとして私がめざしたひとつの境地だったからである。苦しい溜息をつきながら、イイヤ活字を追う教科書のごとき小説だけは書きたくない。

しかし、ひどく遅筆の私にとって、この「技術」の研鑽は、自分の首を絞める結果を招来しようだ。私が半年以上もかかって営々と書いた作品を、読者は一、二時間で読んでしまうからだ。そしてすかさず次のはどうしたとせつついてくる。

やかましく大口を開けて啼きわめく大食いのヒナたちに、餌を運んでいるデブでノロマな親鳥——私は時折そんな情ないイメージに己れを擬することがある。才能不足がつくづく悲しい。

手慣れた手法か。情ないことに、私にはそんなものはないのです、星さん。一行書くたびに胸を掻きむしりたくなる苦痛があるだけです。私は星さんのように自己のスタイルを明確に確立した作家ではなく、この先どうなってしまうかもわからない人間なのです。

私のように才能乏しい作家は、心臓をえぐりだして、読者にさしだすことしかできないのです。

手慣れた手法があれば、私はウルフガイ・シリーズを大量生産し、あつという間に読者に食傷されるぐらい朝飯前だろうと思う。私にそれだけの才能があれば、必ずやるだろう。読者の催促^{さいそく}状^{じょう}を読まずにすむものなら、盗作でも強奪でも敢えて辞さないだろう。

正直に言って、ウルフガイ・シリーズの新作に取り組むのは何年先になるやらわからない。病人が体力の回復を待つように、自然に氣力がみちてくるのを待つほかはない。

だから、実をいうとここに舞台を借りて発表するのは、ウルフガイの新作の「あとがき」である。作品が出る前に、その「あとがき」を発表してしまうのは、けだし前代未聞であるに違いな^いい。新作がなかなか出ないお詫^わびに、せめて読者のみなさんに、あつと驚いていただこうと思う。

目次

あとがきの前払い……………3

PARTⅠ……………9

スペシャルウルフガイ劇場(1)
新・七匹の仔山羊……………10

スペシャルウルフガイ劇場(2)
悪夢の中の狼男……………36

PARTⅡ……………53

エッセイ
変質作家はだれだ?……………54

スペシャルウルフガイ劇場(3)
狼の日……………64

PARTⅢ……………77

エッセイ
トランキライザー……………78

スペシャルウルフガイ劇場(4)
あいづと私……………85

PARTⅣ……………143

エッセイ
狼憑きの記……………144

スペシャルウルフガイ劇場(5)
『狼のレクイエム』改訂版……………156

PART V……………169

エッセイ
8マン↓サイボーグ・ブルース↓ウルフガイ……………170

スペシャル・ウルフガイ劇場(6)

8マン魔人ゴズマ篇最終回より……………181

PART VI……………195

スペシャル・ウルフガイ劇場(7)

ウルフランド消滅……………196 平井和正氏・急逝・追悼座談会……………227

あとがき……………231

—^ウル^フの^ラ世^ン界^ド・PART<I>—

スペシャル・ウルフガイ劇場(1)

新・七匹^{ひき}の仔^こ山^{やま}羊^{ひつ}

スペシャル・ウルフガイ劇場(2)

悪^{あく}夢^むの中の狼男

新・七匹の仔山羊

昔むかし、人間がいまのようにやたらに威張りだす前は、動物たちも言葉を喋っていた。

なぜ彼らが喋るのをやめてしまったかという点、また別のお話になってしまふので、いまは書かない。ただ、人間のあまりにもいやらしい成上り根性に呆れて、動物たちは黙りこんでしまったということだけ書いておく。喋る習慣がなくなってからすでに久しいので、もう彼らはなにも喋れない。筆者が昔習った英語と同じである。

まあ、そんなことはどうでもよろしい。とにかく昔むかし、森のはずれに山羊の一家が住んでいた。どこの森だって？ SFファンという連中は特別に頭のいい種族なので、場所の設定まで厳密にやらなきゃ気がすまないらしい。昔の子どもはそんな細かいことは気にしなかったものだ。

その森はアッカーマンという森、別名森優(SF作家)——なんてウソだけだね。

さて、その山羊一家は欠損家庭だった。七匹の仔山羊とお母さん山羊の母子家庭。どういうわけか、お父さん山羊がいない。

一説によると他に女をこさえて逃亡したのだともいうし、また一説によると東洋から来た空手使いの達人に角を折られて死んだのだともいう。その名人は牛の角を折る前の手馴しにしたんだそうであるが、まさかマス・オーヤマではあるまいと思う。とにかく昔のことだからだ。

で、お母さん山羊というのが、これがなかなかの美人であった。色っぽい流し目なんぞ使うと、男はだれでも思わずブルブルッとして、ちやうどオシッコを我慢しているときのような慄えがくる。しかし、実は凄いいアブズレ、昔スケパンで鳴らしたそうだから、女というのは油断ならないよ。お父さん山羊の蒸発にもレッキとした理由があったのかもしれない。

ある日のこと、このお母さん山羊が、山賊ども——野犬の群れにつかまってしまった。スケバンあがりの狡がしこい女ともあろうものが、なんでまたあつさりピンチに陥ったんだろね。しかし、いとも安易に、成行的にそうなってしまったのだ。山野浩一大先生（評論家）に叱られそう。

野犬群は総勢三〇頭ほど、いずれもむさ苦しく汗臭く、野蚕で獐猛で、山賊みたいに凶暴な荒くれどもだった——もちろん本当の山賊だけど。牙を剥いた顎の間から、泡の混った大量のよだれをだらだらと垂れ流し、餓えきったぎらつく目で彼女を凝視し、早くも腰の前部を隆々とそびえたたせていた。（智子ちゃん、どうも下品になってしまつて、ごめんなさい。平井先生はナニが好きですね、という投書がどっさりくるわけだ）

状況としては、どうあがいても逃げられそうもない。凶漢どもは哀れな美女に群り寄り落花狼

藉（せき）（なんでこんなところに狼という字が出てくるんじや。けしからん）その詳細（しょうさい）を描写すると警視庁（けいしちょう）がちょっと来いと筆者（わたくし）をひっぱって行き、石川達三（いしかわたつぞう）先生（せんせい）が身（み）から出た錆（さび）だと冷（ひや）ややかにおっしゃることであらう。

しかし、山羊の美女が例の色目を使いながら、なまめかしく身をくねらせ、以下のごとく発言したので、筆者（わたくし）の窮状（きゆうじょう）は救（きう）われることになったのであった。

「ねーえ、野犬（やけん）さんたち。（このねーえという発音（おんき）に年季（ねんき）が入っている。なにしろ中学生時分からセーラー服趣味（きずみ）の中年男（ちゅうねん）をたらしこみ、会社（かいしゃ）や家庭（かてい）に押しかけると恐喝（きょうかく）して金を巻きあげていた凄腕（せきわん）のスケバンさんだったのだ）あたしのような大年増（おとしず）じゃあまりお氣（め）に召（め）さないんじゃないかしら？ それよりか、あたしの家（い）へいらっしゃいよ。若（わか）くてピチピチした女の子（おんなこ）が七匹（しちひき）もいるわよ。凄（せき）く可愛（かわい）いわよう。全員（けんいん）中学生（ちゅうがくせい）と高校生（こうがくせい）、ちやうど食べごろなの。あたしひとり（ひとり）が相手（あいて）じや、サービスも行きとどかないし、順番（しりば）を待つのが大変（たいへん）よ。いまだって待ちきれないで出（で）しちゃったシトがいるくらいじゃないの。（ますますいやらしくなってきた。ごめんごめん）ねえ、どうかしら？ あたしを逃（に）がしてくれるなら、女の子（おんなこ）たちのところへご案内（ご案内）するわよ」

なんとひどい母親（はは）ではあるまいか。

野犬（やけん）たちは顔（か）を見合（みあ）せた。たしかに年増（としず）の牝（めす）山羊（やぎ）一匹（ひとひき）では物（もの）足りない。その代わりに七匹（しちひき）の可愛い女の子（おんなこ）を提供（ていきょう）するといううまい話（わ）に、耳（みみ）を貸（か）さないわけにはいかなかった。こいつらはもとも頭（かぶ）が足りず、その上（さ）欲（よく）呆（ぼろ）けしているのである。

「セーラー服かいな？　ほんまにセーラー服の女の子をやれるんかいな。わあ、ほんまか、おばはん!」

「トルコへええ値で売れるで!」

「ええなあ、ええなあ!　わい、セーラー服大好きや」

「わい、思うただけでもう漏れそうや。いま漏れる、すぐ漏れる」

「アミダで順番きめとこ。わて、クジ運強いんやど。一番バッターで選りどりみどりや!」

「アミダやと?　けっ、なに吐かしとんねん、このガキヤア。どづいたろか、こら。こういうのんはなあ強いもん勝ちや。親分はんが最初にゆつくり味見して、次が代貸、若衆頭の順じや。おんどれのような三下はセンズリでも掻きさらしとれ」

「そら、殺生やがな。わても混ぜてえな」

「じゃかましい!　ヤクザの世界は厳しいんやど!　弱い奴は便所のスリッパと同じじや。四の五の吐かしてみい、咬み殺したるど!」

「ジャンケンでもあきまへんか?」

「兄さん、切符要りまへんか?　ええ席やで。リングサイドや」

「ダフ屋まで出てきよったわ」

「わあ、整理券くばっとるで!　はよ行こ。いい席取らなあかんわ」

「割りこんだらあかん!　順番や順番や!」

「なんじゃあ文句あるちゅうのんか、わりゃあ」

「うー、わんわん」

「ぎゃんぎゃん」

「ほっちっち。イの一番や！」

「わいのんは番号がないど！ どないなっとんのや？」

「そらハズレや。ほな、残念でした」

「インチキや！ イカサマや！」

「せやせや。おんどりゃあ、だれに断わって整理券くばっとるんじゃ。さてはシマ荒しやな」

「いてまえ！ スマキにしたれ！」

「ぎゃおん、ぎゃおん」

「うわおう、うわおう」

「死刑じゃ、死刑じゃ」

「おまえら、静かにせんかい」

と、野犬のボスが一喝した。さすがにずしんと威迫があり、咬みあっていた野犬たちはびたりと静かになった。ボスは図抜けた巨大な体軀のドーベルマンだった。全身傷痕だらけで、鼻面の無気味な切傷に凄みがある。狼の群れとの喧嘩で負ったと自称しているが、これは眉唾。狼一族の結社は強大で、野犬群のようなヤクザな無職者ではない。はじめから喧嘩にならないのであ

る。野犬風情では、狼の封土に足を踏み入れることもできない。

「よっしゃ、女。おどれの話に乗ったろ。おどれの身の安全は保証したるさかい、案内せいや」と、ボスは舌なめずりしながらいった。

「おどれはきつと逃がしたる。わしが約束するで」

「さすがは親分さん。話のわかりがいいこと。うんとサービスさせていただくことよ」

牝山羊はくすくす笑いながら、ボスにすり寄り、腿をつねった。腹の中で赤い舌をべろりと出しているのに、ボスは気がつくわけもない。いやらしく頬がゆるみ、まったくの鼻下長。

「ウチの娘はみんないい子ぞろい。可愛がってやってね、親分さん。もしよろしかったら、このあたしもついでに」

「うふ、うふ、うふふふ……」

完全にたらしこまれてしまった。野犬なんてボスであっても、やっぱりアホなのじゃ。

「だがなあ、女、もしウソやったら、ただじゃすまんぞ。わかつとるやろな？」

「あーら、念には及びませんことよ……」

牝山羊が媚び笑い、ボスの喉をくすぐる。

「うふううふうふう……ほなら、まあ、案内してもらおか」

「あの、親分はん。その女のいうこと、そないに信用してよろしいんでつか？ わたいにはどうも信用でけまへんのでっけどなあ。それに明日の一万円より今日の百円と孔子さまもいわはって